

報告

Third International Congress on Symbiosis (TICS) August
13-19, 2000 in Philipps-Universität in Marburg, Germany

柴田 玲子

名古屋大学大学院生命農学研究科

第3回共生国際会議が、2000年8月13日から19日までドイツのマールブルク (Marburg) において開催されました。マールブルクはフランクフルトから電車で一時間ほど北にある町で、ドイツの4大大学都市の一つです。多くのドイツの街がそうであるように、丘の上に城があり、そこからは美しい街を一望することができました。会議の参加者は320名ほどで、そのうち約半数は地元ドイツから、続いてアメリカ合衆国14名、フランス13名、イギリス12名、カメルーン11名で、その他34カ国、計39カ国からの参加がありました。日本からは6名の参加がありました。

会場は、Get-Together-Partyのみマールブルクの観光名所の一つである Alte Aula (Old university) とその教会で行われたものの、口頭およびポスター発表は大学内の大きな講義室が使われていました。講義会場は空調設備がなかったようで、窓を開けるために外部の雑音が開いてくることや暑さを感じるなど、あまり会場にはこだわっていない感じを受けました。それでも、予鈴のかわりに電車がホームに入ってくる音が使われ、またブレイクタイム後の発表開始の合図にハンドベルが鳴らされるなどで、どこかユニークな趣を感じました。合計で74題の口頭発表がありました。そのうちいくつかの口頭発表で PC が使われており、音楽や動

画が使われるなど、楽しませる演出も多く見受けられました。

内容は菌根菌に関するものが多く、その中でも分子生物学を用いたものが目立ちました。菌根菌以外のものでは、根粒菌、地衣類、昆虫類、原生動物、さらに海洋関係では藻類の話など、広い範囲に渡って議題がありました。また、それらは分子生物学だけではなく、生理学や生態学、形態学などさまざまな分野で発表が行なわれていました。ポスター発表では、菌根菌と重金属吸収との関連性についての研究がよく目に付きました。重金属、特にカドミウムによる土壌汚染が植物の生育に問題をきたす可能性があるだけでなく、人体にも害が及ぶことが懸念されていて、世界に共通した問題であることを実感しました。

また7日間の会議中には、いくつかの面白いエクスカッションが用意されていて、私たちを楽しませてくれました。期間中に2回用意されていた "Student Pubs of Marburg" は、Philipps-University の学生のかたが、参加希望者を街の複数の Pub に連れて行ってくれるというもので、4、5軒の Pub をはしごしているようなビールを飲んだ人もいらっしやっただけです。私にとってはなかなか入りづらい Pub などに連れて行ってもらえて、楽しいエクスカッションでした。日本でいうなら "居酒屋はしごツアー" みたいなものではないでしょうか。来年、名古屋で開催される第6回国際根研究学会でも、そのようなツアーがあったら、外国人の研究者の方々が喜ばれるのではないのでしょうか。また私たちにとってもより多くの人と気軽に話をする機会が増えて楽しい企画ではないかと思います。このような国際会議は私にとって初めての経験であり、とまどうこともたくさんありましたが、多くの研究者にお会いして話をすることができたことは大変良い経験で、よい刺激になりました。

